

まるで、
天使

Queen of Heaven.

本編軸学園軸クロスオーバー
入れ替わり天使パロ伊奈スレ

目次

White01	3
Black01	11
White02	27
Black02	43
White03	63
Black03	71
White04	80
Black04	90
White to Black	94
Black to White	101
Black and Orange	105
Heavenly blue	113
Epilogue.....	119

White01

その青年には翼があった。

「大丈夫？」

鳥のような羽毛の大きな翼。血に塗れて、白と赤のまだら模様になっていて、ぞっとするような変な角度に折れ曲がっている。伊奈帆は咄嗟に駆け寄り先のように声をかけた。歳は自分より少し上か。金髪に白い肌。この辺りの生まれではない。青い服を着ていて、破れたところに傷がある。腕も足も、肩も顔も大きな翼も、そこら中に怪我をしている。空から人が落ちてくるなんて、しかも翼があるなんて、途轍もなく非現実的な状況だが、現実だ。

ほうっておけない。

「……触、るな」

伸ばした手は弾かれた。瞼が開き、鮮やかな碧の双眸がこちらを鋭く睨む。迫力がある。正直、気圧されたが、ポーカーフェイスは得意技だ。伊奈帆は平静を装い淡々と告

げる。

「怪我をしている。手当をした方がいい。それに、その翼」

翼？ と青年が眉を顰める。地面に横たわる身体を捻り、自身の背中を肩越しに見て静止した。舌打ちと独白めいた小さな罵倒と深呼吸。数秒の後、ゆっくり伊奈帆に向き直る。そして大きく目を見開く。無遠慮な視線がしゃがんだ僕の制服姿の全身を上から下まで三往復。

「お前……。……伊奈帆？」

「え？」

これには、ぽかんと口を開けて間拔けな声を出してしまった。この人、一体何なんだ？ 「僕を知ってるの？」

新芦原の川べり。高架の影と光の境目で、傷だらけの天使は皮肉げに笑った。

「おい」

「何？」

救急箱の在庫を使い果たした成果によって、ガーゼとテープと包帯だらけの翼の男が目の前に置かれた皿を凝視する。

「これは一体……」

ずる休みの午前十時、自宅のダイニングテーブル。キッチンに向く席。翼を背もたれの両側へと垂らし、窮屈そうに座る彼の前には湯気の立つ料理の乗った皿とスプーン。

「チャーハン。焼き飯。知らない？」

ネギとハムと卵を具にした米飯を塩胡椒と醤油でシンプルに味付けした中華風家庭料理である。テフロン加工のフライパンを濡らした布巾の上に置き、伊奈帆はコンロの火を止めた。ケトルの湯を急須に入れて、テーブル中央へと配置。湯呑みを二つ棚から取り出す。

「そうじゃなくて、何のつもりだ？」

ヒステリックな響きが混じっているにせよ、柔らかくていい声だな、と関係ないこと

を思う。

「お腹空いてるかな、と思って。顔色悪いし」

コポコポコポ、と急須から湯呑みへお茶を注ぐ。一つを青年の前に差し出した時、ぐう、と向こう側で腹の虫が大きく鳴いた。伊奈帆の口元が弛む。

「どうぞ。召し上がれ」

「……イタダキマス」

青年は観念したようで、素直にスプーンを手にして手を合わせた。

「日本に来て長いの？」

「は？」

「今、いただきますって」

意外な仕草だったのだ。言葉は通じる。話もわかる。

しかし、なんとも不思議な相手である。なぜか伊奈帆を知っている。背中の翼といい、囚人めいた青い衣服、傷だらけの上、裸足であること。どう見ても、学校とか、バイトとか、仕事とか、そういう当たり前前の日常を送っているとは思えない人物だ。祈りの言

葉ならともかく、「いただきます」なんて、そんな日本特有のクラシカルな食事の挨拶をするとは思ってもみなかった。

スプーンで山の端から掬い取りつつ、青年が鼻を鳴らした。

「言わないと、伊奈帆がうるさい」

「僕？」

何のことだと聞き返す。青年は視線をチラリと寄越し首を振る。

「お前じゃない」

ばかり、とご飯を口に入れ、もぐもぐ頬張り、会話は途切れる。

「？」

仕方がないので、伊奈帆は食事を続ける彼をじいっと見て待った。晴れた五月の光がレースカーテンから透ける。緑茶の香りが焦がし醤油の匂いと混ざる。食器の僅かな接触音と、換気扇の音がする。伊奈帆はお茶を何口か飲んだ。

皿の上が半分くらいになった頃、青年が根負けしたように肩をすくめて口を開く。

「……僕の知っている伊奈帆は」

頬のガーゼを留めるテープが引き攣った。両手は机の上に拳の形で握られ、スプーン
の先端が天井を向いている。

「無愛想で朴念仁で、理屈っぽくて情緒がなくて細かいことをネチネチネチネチ。料理
が好きで、チェスが強い」

伊奈帆は小首を傾げ、しばらく考え頷いた。

「後半部分は当てはまるかな」

言葉は違えど、似た意味のことを前半部分も指摘されたことはある。

青年は首を振り、スプーンを飯に突き刺した。

「でも、お前は違う」

「何が？」

聞くが、青年は食事を再開し、返答はない。

「いや……。僕の方か」

黙々と食べ続けるが、最後の一口となり彼は手を止め俯き加減で皿の上をじっと見た。
「だから、何が？」

ゆるゆると、碧眼が伊奈帆へと向く。先程までの刺々しい感じではなく、呆然とした表情だった。

「月を見て分かった」

「月？」

「僕の方が、違うんだ」

そして最後の一匙を口へと運ぶ。難しい人格のようだ。聞きたいことは山ほどあるが、ストレートな答えはあまり期待できそうにない。そう考え、伊奈帆は口を開く。

「あなたの名前は？」

青年はスプーンを取り落とす勢いで伊奈帆に顔を向け、やがてプツと吹き出した。俯き加減で咀嚼する口元に笑窪が一つできている。

「何て呼べばいい？ 天使？」

ヤケクソ気味にそう聞くと、仮称天使の肩が上下し激しく咽せた。冗談じゃない、という顔で口をひん曲げ、ぼそりと呟く。

「コウモリ」

聞こえた単語は、あまりに似つかわしくない。だから伊奈帆は問い返す。

「は？ コウモリ？ 本名？」

くくつ、と彼は喉を鳴らす。スプーンを皿の上へ音もなく置く。

「お前は、そう呼んでたよ」

「何のこと？ 初めて会うけど」

「お前は、な」

そう言つて、コウモリはケラケラと笑いだす。話にならない。しかし、丸切り嘘でもなさそうだ。伊奈帆は無言で、目の前で湯呑みを片手で持ち上げる傷だらけの青年を眺めた。白い翼の蝙蝠なんて、変だなあと思いつつ。

Black01

呼び出しを受け、その内容から取るものもとあえず、一目散に文字通り飛んで来た伊奈帆は、極秘施設最深部にある独房にて顎に手を当てふむ、と頷く。

「情報量が多いな」

目の前のベッドの上の非常事態を再確認。ここは軍関係者の一部にしか存在理由も意味も意図も知られていない僻地の収容施設である。嚴重なロックを幾重にかけて閉じ込めているのはたった一人の囚人だ。先の戦争の戦犯として、社会的にはすでに処刑も済んでいる。彼自身の行動原理に起因しない、ありとあらゆる罪状を貼り付けられた上で。まあ、そういう、ヘビィでダークでシリアスで、どうしようもなく理不尽な現実の一端がここにあるはず。なのだが。

「別人にしては似すぎだよな」

ベッドの上で正座をし、小さくなって俯いている少年を伊奈帆は眺める。プラチナブロンドの猫毛に抜けるような白い肌。華奢な造りの骨格。吊り上がった毗。伊奈帆を見

る時三白眼になる、蛍の名を持つ鉾石めいた瞳の色。下がりきった眉尻で、猫目の瞳が不安そうに左右に泳ぐ。

すごく似ている。けど、全然似ていない。一体どうしてこんなことに？

「どういう状況ですか？」

隣の刑務官に尋ねる。この現場のリーダーであり、付き合いも短くない。信用できる人材だ。

「見回りに来たら、見ての通りで……」

「界塚中尉」

背後から、駆け足とともにもう一人刑務官がやってきた。

「はい」

伊奈帆と同じ年くらいで、何かと気がつき、裁量の中で取り計らってくれる人物である。

「監視カメラの映像を確認しました。事の起こりはマルナナヨンゴーです」

「四時間十八分前か」

記録映像では、シャッターを押すように突然姿が変わった、とのこと。改竄の可能性はかなり高いが、それを考慮から外すと、着替え、別人が来て入れ替わったわけではなく、姿形が変化した、ということになる。

ありえないが、とりあえず現状を把握しようと伊奈帆は決めた。

「君の名前は？」

びくつ、と肩が震えた。おどおどとした表情や態度に途方もない居心地の悪さを感じる。

「スレイン・トロイヤードです……」

だろうな、と思いつつ、全く納得できないままに伊奈帆は自身の顔を指さす。

「僕の名前は？」

「へ？ いえ、知らないですけど……」

目の前の少年がこいつは何を言っているんだ、と顔に書いてこちらを見つめる。取り繕うとか、駆け引きとか、そういうことが全くない。なんだかこちらが悪いことをしている気分になってくる。

「その服は？ どうしたの？」

「今日から通う学校の制服です」

伊奈帆の眉がぴくりと動く。カフェオレ色のブレザーに、黒のパンツと臍脂のネクタイ。伊奈帆がかつて通っていた、芦原高校とほぼ同じデザインだ。あまりにも見覚えのありすぎる制服だが、左胸の校章部分が僅かに違う。

「それ、なんて学校？」

だから聞いた。スレインと名乗る少年は、背筋を伸ばしてこう言った。

「私立アルドノア学園です」

「ブッ……」

これには思わず笑ってしまった。なんだそれ。一体誰が、そんな笑えない冗談みたいな名前を？

少年が、怪訝な顔で伊奈帆を見つめて首を傾げた。伊奈帆はコホンと咳を払う。

「いや、ごめん。えっと、歳は？」

「十六歳です」

「へえ」

十六歳。それが本当なら三つ下だ。

「ちょっと、立ってみてくれる？」

伊奈帆が片手を開き促すと、少年は正座をしていた脚をほどき、ベッドサイドへ移動した。

「こうですか？」

そして伊奈帆の前に立つ。靴はダークブラウンのローファー。上目遣いが伊奈帆を見ながら、あからさまに逸らされる。

伊奈帆は心の中で、彼の頭頂部の高さに自身の片手をあげ、前後に往復運動させた。これは完全勝利。ミリ単位ではなく、センチで勝ってる。

「うん。新鮮」

ぽそつと呟く声が聞こえたらしく、少年が小動物っぽく小首をこんと傾ける。

「新鮮？」

「こっちの話。最後に、もう一つ」

「何ですか？」

伊奈帆は少年の肩に触れ、身体の向きを変えさせる。そして背中を指で示す。

「その翼は、どうなってるの？」

芦原高校に酷似した制服を突き破り、大きな鳥の翼がにょきつと生えている。色は黒。天井照明で、羽毛部分が艶々と濡鳥に輝いている。

少年は首を振る。

「僕が聞きたいくらいです。気がついたら、なんか生えてて……」

引っ張ると痛いし、新品の制服に穴が開いちゃったし……、と情けない顔になる。涙目だ。これ以上何か聞くと、泣かせてしまうかもしれない。

「なるほどね」

「何かわかりましたか、中尉」

若い方の刑務官が伊奈帆に聞いた。

「全然」

「は？」

「わからない、ということがわかった。普通じゃないね」

黒い翼の少年は、目の前の大人たちが話すところを、息を詰めて見守っている。スレインにしか見えないが、どう見てもスレインには見えない。こんな殊勝で弱々しい上、歳下なんて落ち着かない。

「似てるけど、全然違うし。どこに行っちゃったのかな」

伊奈帆が小さく溜息をつく、少年が躊躇いがちに口を開く。

「あの……。似てるって、誰のことですか？」

「ここにいた人」

それ以上、答える気にはなれなかった。

少年は口をぎゅっと引き結び、しばらく何かを考えていたが決意したふうに息を吸い、伊奈帆を見上げた。

「あの……！」

ぐうぐう、と遮ったのは腹の虫。これには伊奈帆は吹き出した。見ると、刑務官たちもくすくす笑っている。場が和み、顔を赤くする少年に伊奈帆はこう聞く。

「ご飯食べる？」

「えっと……」

「食べるよね」

「あ、はい」

半分無理矢理に返事をさせて、伊奈帆は満足し頷く。刑務官たちも嬉しそうだ。何せ、僕らは一度も聞いたことがない。『彼』のお腹が鳴るところなんて。

「すぐ用意するよ。それまで、これで我慢して」

ポケットを探ると、前に買った税込二十三円のバラ売りのチョコが三つある。差し出すと、少年はおずおず手を出した。

「ありがとうございます？」

多分、初めて見るから、何をもらったのかわかってないんだろう。

「うん。いいね」

それはあの人と同じだ。コーヒースガーが好きだったな。

よくよく見ると、似てるかも。戦争とかが無かったら、こういう人だったのかもしれない。

ない、と思ったところで、伊奈帆は自身に向けてシニカルに笑う。
超常現象として、僕はこの子を受け入れ始めているな、と。

コトン、と小さな音を立て、スレインの前に料理の乗った皿が置かれた。
「はい、どうぞ」

向かいのソファに腰掛けるのは、紺色の制服を着た青年。大人がたくさんいる中で、多分一番若いのに、多分、一番偉そうな人。顔だけ見ると同じ年くらいに見えるけど、どうやら僕より歳上らしい。

「えっと……」

薄暗くて狭い部屋から、今いる対面ソファがローテーブルを挟んで置かれた居心地の良い場所に連れてこられた。二人の大人がドアの近くとソファに座る僕の後ろにいたけれど、怖くて話しかけたりできないままに待つこと約三十分。唐突に扉が開き、お待たせ、と現れた彼はお盆を持ってきた。

そして置かれたオムライス。ラグビーボールのような形で、黄色い薄焼き卵にケチャップがかけられている。出来立てで、しかも多分手作り。

「味見したし、美味しくてきてると思うよ」

青年の言葉に、スレインは思わずええつ、と声を上げる。

「貴方が作ったんですか？」

「うん」

スレインは再びガラス張りのテーブル上、どでん、と置かれたオムライスをまじまじと見た。お父さんと二人暮らしたから、少しくらいは料理ができる。トーストとか、ホットケーキとか、あとはえっと、火の通り過ぎた目玉焼きとか、なんかそんなの。

それを思うと、眼前のオムライスは卵にまだらやシミひとつなく、形も綺麗でめっちゃくちゃ上手。スレインは視線を上げて、今度は青年の顔を見る。目が合った。表情の薄い顔でこちらを見ている。若そうな見た目と紺のブレザーから、クラスに一人はいそうな感じの、数学とかが得意なタイプの学生に見える。左目には眼帯があり、それが異様な感じだった。

この人、一体なんなんだろう？ それよりここは一体？ さっきの場所は何だろうか。印象としては病院が一番近いけど、いるのは制服姿の体格のいい人ばかり。

「あったかいうちに」

考え込んでいると、そんな言葉が聞こえた。確かに、こんなに美味しそうなオムライス、冷めてしまつてはもったいない。スレインは我に返り、スプーンを持ち上げる。

「いただきます」

両手を合わせると、青年が片目をぱちくりさせた。何か変なこと、言つたろうか。

オムライスの右端部分をスプーンの手で切り離す。ぶわつと湯気が白く立ち、ケチャップライスのオレンジ色が鮮やかに覗く。スプーンで掬い、ぱくりと一口。

「おいひい……!!」

すつごく美味しい。翼がわさわさつと動き、空腹が自覚され、スプーンで口に運ぶペースが早くなる。低いテーブルなので背中が丸くなつちゃうけれど、美味しいんだから仕方がない。

「そう、良かった」

がつがつと食べる僕に、青年がそう言った。チラリと見ると、無表情。けどなんとなく、嬉しそうに見える。

コンコン、とノック。続いて失礼します、とドアが開く。青年が立ち上がり、扉のところで外の人と何か小声で話している。あんまり見ちゃだめかな、と思い食することに集中する。

ドアが閉まる音。

視界に入る紺のズボン。

と、お皿の近くに袖と小ぶりのカップ。でこぼこした透明の容器の中は一部が茶色の薄黄色。ビニールの蓋がついていて、その上にラップされたプラスチック製のスプーン。

「へ？」

「君に、ってさ。デザート」

蓋部分にカタカナで商品名が書いてある。日本語に不慣れでまだ読めないが、これが何かは見えわかる。

プリン。

まごう事なきプリンだ。

「いいんですか？」

僕が聞くと、眼帯の青年はくすりと声を漏らして笑った。笑った顔は、歳上にはちよつと見えない。

「どうぞ」

「ありがとうございます！」

お辞儀をすると、壁の近くの人と僕の後ろの人も小さく笑った。

「どうして皆さん、こんなに良くしてくれるんですか？」

二枚のお皿が空になって僕は聞いた。一枚はオムライスの乗っていたものだけけど、もう一枚は「ぶっちんしたことないの？ お皿持ってくるから」と用意されたプリンを乗せるためのもの。初めは、何のことかさっぱりわからなかったけれど、やってみると面白くて、日本の食べ物すごいなあ、と感心した。僕がぶっちんする時には、扉の外

からも三人くらいやってきて、僕が驚いた声を上げると、何故か拍手が起こってしまい恥ずかしかった。

「嬉しいんだよ」

「うれしい？」

一番大きな拍手をしていたのはオムライスを作ってくれたこの人だ。彼はこくりと頷き口を開く。

「うん。君が美味しそうに、ご飯食べてるから」

「ご飯が美味しいのは、貴方のおかげだと思うんですけど、……あ」
そういえば、僕は名前を言っていたけれど、彼の名前を聞いていない。

「あの……。えっと、名前……」

「ああ。ごめん。名乗ってなかった？」

青年は口を開いてぴたっと止まり、右目をぐるりと巡らせた。顎に手を当て数秒後。
「オレンジ色って呼んで」
と言った。

「はあ？」

オレンジ色って。何のこと？

「それ、本名ですか？」

オレンジ色と名乗った男はぷつと笑う。

「まさか」

少し俯き、膝の間に垂らした両手の指を組む。

「あだ名だよ」

その動きで、袖口の金のラインが光の反射できらきら光った。

White02

「お姉さんは？」

窓の近くの床に、片膝を立てて座ったコウモリ——と名乗る青年——が藪から棒にそう聞いた。

「出張中」

キュ、と蛇口の水を止め、伊奈帆は布巾で手を拭きつつ軽く答える。洗いカゴには、水滴の光る食器が整然と並べてある。コンロのポットをチラリと見る。蒸気はなく、まだ湯は沸いていない。沸騰がわかるように、注ぎ口の笛を閉じる。

そこで気づく。

「言ったっけ？ 姉貴がいること」

振り向き聞くと、コウモリは目を丸くしてこちらを見た。瞬きの後、横方向に首を振る。

「いや」

伊奈帆としては説明が欲しかったが、コウモリは自嘲気味に笑って視線を窓の向こうに向けた。ふんわりとした午後の陽射しが、床の上にへたりと広がる彼の翼の輪郭を光の粒に彩った。無造作に重なる足首は、翼と同じくらい白く、陶器のように滑らかで、そして冷たそうに見える。

「お前、学校は？」

ぼうつと突っ立っていると、コウモリがまた聞いた。外に顔を向けたまま、視線がチラリと伊奈帆に届く。

「明日は行くよ」

「それがいい」

エプロンの肩ひもを引っ張り外す。縦にたたんで椅子にかける。流しに腰でもたれ、呼吸を整え口を開く。

「……あのさ」

「なんだ？」

コウモリが顔を向けた。少し遠いが見上げる姿で、伊奈帆は彼の三白眼を見る。光の

中で、瞳は不思議な色に見えた。科学の実験で使った鉋物の色を思い出す。過熱による発光で、碧の石から紫色の炎が発した。

翼があつて、傷だらけで、裸足で、病院着のような服。腕も足も関節の骨の形がわかるくらいに痩せている。北欧系の整った容姿。

「行くところ、あるの？」

どう見ても訳ありだ。それも超下級。これまで伊奈帆が出会った人間と比べると、桁外れに規格違い。

「ある」

返事は呆気なかった。

「そう」

その時、ピュー、と甲高い音。薬缶だ。伊奈帆はコンロの火を止めて、沸騰した湯を急須に入れる。

コポコポと注ぐ湯は大量の蒸気を発生させ、周囲が白くぼやけ、熱い水気が頬に当たる。

二煎目のお茶の仄かな香り。伊奈帆は机の上に鍋敷きと急須を置き、自分の椅子に腰を下ろす。急須の口から漂う蒸気を眺め、ぼんやりと考える。

世界が違う。

きつと、コウモリが行くに行ってるその場所は、こんな呑気な場所じゃない。手当てをした時にわかった。空から落ちて、できた傷ばかりじゃない。身体中に、消えない傷がたくさんあった。

平和じゃないし、多分、学校に行くとか、休日に友だちと出かけるとか、特売のチラシに一喜一憂するとか、家族がちゃんと帰ってくるとか。そういう、僕にとっての当たり前の幸せなんて、この人にはないんだろう。

そんなところに、できれば戻ってほしくない。出会ったばかりなのに、そんなことを考えてしまう自分がいる。

「伊奈帆」

いつの間にか、コウモリが向かいに座っていた。机に肘をつき、少し前屈みに伊奈帆を見ていた。真面目な表情で、真っ直ぐこちらを見つめている。生傷だらけの痛々しい

顔の両目は柔らかく細く、結んだ口が弧を描く。とっつきにくく荒んだ感じの気配は消えて、柔らかくあたたかな微笑みが湯気の線の向こうに見える。

「帰らないといけない。でも、行き方がわからない」

その言葉を理解するのに数秒間も必要だった。だって、そんな顔で笑えるなんて知らない。綺麗すぎて、そのまま霞んで消えちゃいそうだ。なんだか、本当の天使みたいに思えてしまう。

伊奈帆はバラバラに置かれていた二つの湯呑みを引き寄せる。急須を持ち上げ、円を描き、湯を揺らす。

「じゃあ、それまでここにいたら」

隣り合った色違いの湯呑みに交互にお茶を注ぐ。湯気の白さが互いの顔をぼかした。

「そうする」

コウモリは言って、湯気の立つお茶をごくりと飲んだ。

非現実的な光景だ。

「なあ、砂糖はどっちだ？」

西日の中で振り向く背中には巨大な翼。肩甲骨の翼の付け根の下を潜ってクロスするのはコントラストも鮮やかな黒のエプロン紐。腰のあたりのリボン結びが軽く揺れる。

「蓋が赤い方」

「これか」

伊奈帆がダイニングテーブルの自席で調理台に三つ並ぶ、取手のついたプラスチック容器を指さす。白い翼のコウモリ男は、赤い蓋を梃子の原理でパカリと開く。そのタイミングでもう一言。

「大さじ三杯」

「オオサジ？」

「それ。メジャースプーンのこと」

「ああ」

白い大さじで無造作に砂糖を掬い、ボウルにポンポン放り込む。すり切りとか山盛り

とかの概念は、彼には、まだないらしい。

「あとは、ムラなくかき混ぜる」

「ムラ？」

「丁寧に攪拌」

「わかった」

カシヤカシヤカシヤ、と金属ボウルの中で菜箸が楕円を描く。料理初心者だと聞いていたが、思ったよりも手際がいい。

「フライパンを火にかけて」

「火に……、かける？」

フライパンをあらゆる角度でコンロの火に近づける。このへんが、初心者が初心者たる所以だろう。料理用語が通じない。

「普通にコンロ台に置いて」

「こうか」

「油をひいて」

「油を……、ひく？」

「フライパンに油を入れる。ちょっとだけね」

「どうして、ひく、って言うんだ？」

「専門用語」

「ふうん。奥が深いな」

金髪の、生傷だらけの天使が料理を作ってる。換気扇の音が大きい、タイルの褪せたレトロな日本の小キッチンで。

事の起こりは、ほんの小一時間前。学校から帰宅した伊奈帆は、両手に買い物袋を提げていた。特売日なので、日用品を買い込んだのだ。ダイニングテーブルに戦利品を広げていると、部屋の片隅窓際にいた彼が立ち上がり、テーブル付近に近づいた。洗剤、トイレットペーパー、レトルト食品、生鮮食料品と、それぞれ仕分けし収納する伊奈帆の様子を眺めている。手伝おうとしたけれど、何に手をつけていいのか分からないんだろうな、と分析。

コウモリを匿い早三日。泊をとまなう出張中の姉の帰宅まであと四日だ。生活してみて分かった事は、コウモリは第一印象よりもずっと普通で大人しいんだと言うこと。会話は少しズレているけれど、まあまあちゃんと成立するし面白い。冗談だって時々言う。暇な時は、家の中の本を手当たり次第に読んでいる。手に取るものは雑誌や図鑑が多かったが、文庫本の小説なども捲っていた。日本語はどのくらい読めるのだろうか、と疑問に思い尋ねると、ものの名前が難しい、との返答。

三個で四九八円だった小ぶりのリングを手の中で転がしつつ、コウモリが口を開く。

「料理を試してみたいんだけど、いいか？」

彼の座っていたあたりに、伊奈帆が購読しているカタカナ七文字タイトル主婦向けレシビ雑誌のバックナンバーが積まれていた。こんな本にまで手を出していたとは、よっぽど暇を持て余していたらしい。

「いいけど、何作るの？」

「簡単なもの。卵のやつがいい」

ぐう、と伊奈帆のお腹が鳴った。時刻は五時半を過ぎたところ。夕飯までのつなぎに

なるような、簡単な卵料理があるかな、と考えた。

ジュワ、と熱した油に卵液が落ちる。パチパチという小気味良い音とともに、縁から黄色が薄くなる。

「手早く掻き混ぜて」

「え、こうか？」

火を使うところは心配なので、隣に立って手順を教える。混ぜ方は少し雑だが、危ない。いい意味で意外だ。

エプロンを貸与しつつ料理経験を聞いたところ、ホットミルク、シリアル、トースト、という心許ない返答だった。レシピ本をどこまで理解できたか、途方もない不安が募る。

料理ほぼ未経験者が作れる簡単な卵料理。そもそも、火加減のデリケートな卵料理が初心者向けではないのだが、考えた末、スクランブルエッグにすることにした。材料が少なくて、見栄えを気にする必要もなく、味付けは食べる時に個々の好みに任される点が選定理由である。本にないので、分量はメモ、過程は口頭でレシピを一通りざっと話

し、わからなければその都度聞くというやり方になった。

「うん。いい感じ」

「そうか？」

半熟の今の状態がどの段階か判断つかないらしくコウモリは首を捻る。翼が、わさわつと動き、伊奈帆はそちらに気を取られる。白い鳥の翼。翼に油はねしないだろうか。せっかく綺麗な白なのだから、といらぬ心配をしてしまう。

「はい、火を止めて」

「もう？」

コウモリは言われた通りにコンロのスイッチを操作した。出会ってすぐから思っていたが、口はともかく行動は実に素直なのだ。

「余熱で火が通るから」

「？ わかった」

多分わかってないんだろうなあ、と思いつつ、伊奈帆は皿を傍に置く。

「はい、よそって」

「よそう？」

「完成品をお皿に移して」

「ああ。うん」

うんって。なんか、かわいい。

ターナーで慎重に、料理を皿へ盛り付ける。シミのない綺麗な黄金色で、初めて作ったにしてはなかなかの出来栄え。

「ケチャップいる？ ソース？ 塩胡椒？」

味付けを聞くと、コウモリはふむ、と顎に手を当て思案すること三秒間。

「お前はいつもどうしてる？」

真剣な顔で聞かれた。なぜかたじろぎ、しかしそれを顔には出さず伊奈帆は冷蔵庫を開ける。扉の方から取り出す調味料は二つ。

「うちは、ケチャップとマヨネーズ」

コウモリは紅白のチューブを交互に見てうんと頷く。

「じゃあ、それにする」

「いただきます」

「いただきます」

時間差で手を合わせ、ダイニングテーブルの中央に置いた皿からそれぞれ自分の分を取り分ける。スプーンの上、卵の黄色にストライプの赤と白が鮮やかだ。口に入れるとまだ温かい。甘い卵に、トマトの酸味がよく合う。

「うん、美味しい」

伊奈帆が言うと、コウモリは、もぐもぐと口を動かしながら伊奈帆を見返す。ごくんと喉仏が上下し、ぱちりと猫目が瞬いた。

「本当だ。美味しい」

他人事のような驚いた顔に、伊奈帆はふっと吹き出した。

「なにそれ。君が作ったんでしょ？」

コウモリが口を尖らせる。翼の先つちよが、接した床をぺちぺち叩いた。

「言われた通りに手を動かしたただけだ」

「本を見ながら作るのも同じ事だよ」

肩を竦め、再びスプーンを口に運ぶ。一応納得したっぽい。伊奈帆も次の一口を掬う。塊が少し細かすぎるけど、とろりとしていて、火加減はばっちりだ。

「そういえば、どうして料理しようと思ったの？」

中央の皿が空になる頃、伊奈帆は軽い気持ちで聞いてみた。レシピ本を見て、やってみたくなったのかなと想像して。

コウモリはびたつと動きを止めて、視線を左右に泳がせた。思わぬ反応に伊奈帆は両目を丸くする。

「ねえ、なんで？」

重ねて問うと、大きな翼がふるふる左右に小刻みに揺れた。はあ、と一つ息を吐き、コウモリは肘をつく。

「楽しそうだな、と思ったんだ」

「楽しそう？」

何が？ と聞く前に肘をついた方の手の平が、くるりと上下反転する。華奢なつくりの

白い手が、軽やかに動き人差し指が伊奈帆に向いた。

「お前が料理するところ、ここに来て初めて見たんだ」

伊奈帆はますますわからない。

「初めて？ そりゃそうでしょ？」

「うん、そう」

続きを待つが、コウモリは目を伏せ微笑んだ。この話はここで終わりだ。続きをせがんでも、多分何も返ってこない。そういうことがこの三日で何度もあった。

夕闇が迫るマジックアワーの空の色。赤と青のグラデーションは、いつもは綺麗に見えるのに。なんだろう。今はあまり見たくない。

「料理をしてみて、どうだった？」

夜になる前に、何か聞いておきたかった。室内は暗く、コウモリの白い翼と白い肌、金の髪が絵画のように浮かび上がる。口が歪に弧を描く。

「面白いが、面倒くさい。一人じゃとてもできそうもないな」

「いいんじゃない？ 二人でやれば」

ククツと笑う声は楽しげだ。翼がひどく大きく異様に見える。
夜に目立つコウモリなんて、おかしいや。

伊奈帆は立ち上がり、天井灯のスイッチを入れた。

Black02

「降参します」

スレインがぺこりと頭を下げた。ローテーブルには勝負の決したチェスボード。極秘施設の応接室、ソファセットに向かい合った状態で、伊奈帆はふう、と息を吐く。

「驚いた。君、強いね」

翼を持った学生服の少年を眺める隻眼を真円に近い形に見開く。血の色の濃い赤褐色の瞳には、楽しい色が浮かんでいた。スレインは首を傾げる。

「そうですか？ 勝ったのはオレンジさんですよ」

オレンジさん、と呼ばれ、伊奈帆は小さく声を漏らす。愉快そうな面差しは存外に幼く、同じ年くらいに見えるな、とスレインは思った。

伊奈帆はソファに背を預け、盤面に視線を落とす。

「ひやっとした。油断してたわけじゃないけど、なんていうか、そう見えないから」
「そう見えない？」

何のことかと問い返すと、伊奈帆はくすりと小さく笑う。

「あまり、強そうに見えない」

ばさつと擦れる音がして、黒い羽根が一枚落ちた。無意識に動く翼が邪魔だなあ、と言いたげにスレインは肩越しに背中を見下ろす。そして再び前を向く。

「馬鹿にされてます？」

その言葉に、伊奈帆はふふつとまた笑う。今日は笑ってばかりだな、と他人事っぽく自己分析。

クリーム色の壁紙と、部屋の隅の細い葉っぱが毛はたきみたいな観葉植物。大きな文机に鍵のついた書棚とロッカー。茶色い革張りのソファとガラス製のローテーブル。その上の黒と白の市松模様。戦場に、黒のキングは既がない。討ち取ったのは白のビショツプ。

「いや。感心してる」

伊奈帆は脳裏の棋譜を一枚一枚検める。慎重で大胆。見切りが早く、攻撃は苛烈。この指し方は彼と同じ。

いや、違うな。もっと言うと、この子の方が洗練されて無駄がない。見た目は弱々しくてぼんやりしてて、ふわふわしてて、正直苛つく。ついさっきまで、オムライスをもりもり食べて口の端にケチャップなんかつけてたのに。やり方はわかるといふから戯れに始めたチェスが鬼のように強い。

「まあ、いいですけど……」

不服そうに口を尖らせあさつての方に顔を向ける。拗ねた感じの表情は、年相応の、どこにでもある普通の高校生に見える。

対戦中の、研ぎ澄まされた瞳の硬度を思い出す。永久凍土のアイスグリーン。

「人とやったの、初めてなんです」

目を伏せ、彼はぼつりと呟く。

「え？ そうなの？」

うん、と頷くスレインは、垂れ下がった翼の先を邪魔くさそうに後ろへはらう。

「だから、次は多分勝てると思います」

スレインが伊奈帆を見る。睨みつけるような上目遣い。肉食獣のような瞳の収縮。不

思議な温度を宿す碧。

「言うね」

言った後、引き結んだ伊奈帆の口が左右非対称に曲がる。向かいの子どもは、百戦錬磨の軍神の、不敵な笑みにも動じない。

「じゃあ、もう一戦」

「はい。よろしくお願いします」

伊奈帆は思う。

別人とは、ちよつと思えなくなってきた。

「寒くない？」

背後の大人が優しい声でそう聞いた。ここ来て七日目の夜。一週間が経っていた。

「えっと、大丈夫です」

スレインは振り向き頷く。確か初日に、プリンをくれた人だったと思う。スーツのよ

うな紺色の仕事着は、場所のせいか黒く見える。金色の飾りがついた袖の手が、室内を指差す。

「何かあったら、そのブザーを押さない」

彼が示すのは、扉の内側にあるスイッチ。丸い形で、プラスチックのカバーがついてる。

「はい」

素直に頷く。青年が自身の額に手を翳す。

「じゃあ、おやすみ。よい夢を」

「おやすみなさい」

ギイ、ガチャ、ガチャンと扉の鍵が回される。光は扉の上部、格子のガラス窓から漏れ入る通路の灯りだけ。スレインはドアに背を向けた。暗い室内には、パイプベッドとデスクとチェア。洗面台と仕切りのないトイレ。窓はなく、壁は古い。

ここはどこで、みんな、一体なんなんだろう？

親切だけれど、名前を覚えてくれない大人たちは、この場所で、何の仕事をしている

の
だ
ろ
う。

ベッドに座り込んで考えていると、翼がぶるりと震えた。しんとしていた廊下に足音と話し声が近づいているのに気づく。そうつと立ち上がり、扉に耳をつけて様子を伺う。金属製のドアはひんやりしていて耳が冷たい。

「えっ、中尉!？」

「こんなところで……」

「本当に？」

「はあ……」

断片的に聞こえてきたのはさっきおやすみを言った人だ。誰かと話している。チュウイ、って何だろう。何か怒られたのかな。

声が消え、足音が消えた。

「スレイン」

「うわぁ!!」

すぐそこ、ドアを挟んで正面からの声にスレインは声をあげて尻餅をつく。

「びっくりした? ごめんごめん」

ドアの向こうの軽い声。この声は聞き覚えがある。出会った人で唯一、名前を教えてくれた人だ。あだ名だけだ。

「えっと、オレンジさん? 何かご用ですか?」

接し方はこちらからいい気味だけど、手料理を振る舞われたり、チエスを指したり、本をくれたり僕に何かと良くしてくれる。そういえば、今日は一度も顔を見てはいなかった。

「ここで寝ようと思って」

「ええっ!!」

ここで? こんな居心地の悪いところで一緒に? なんで?

「どうしてこんなところで?」

「一人にしておけなくて」

お父さん以外の人と、同じ部屋で寝たことないな、ベッドは譲った方がいいかなあ、

この人年上だし、なんて考えつつ。扉が開くのを待った。待ったが。

一向に開かない。

ジイー、とジツパー音。

ごそごそという衣擦れ。

「あ、意外にあったかい」

ん？

「あったかいつて？ 何がです？」

「寝袋」

「つて、え？ そこで？ 廊下で寝るんですか？」

「そうだけど」

どうやら、部屋に入るつもりはないらしい。扉の外で寝袋にくるまっているオレンジさんを想像し、スレインはこんこん扉を叩く。

「え？ だって寒いでしょう？ どうして中に入らないんですか？」

「いや、そういうつもりじゃないし」

「そういうつもりって？」

どういうつもりなんだろう？

意図がわからず考えていると、扉の向こうでくすくす笑い声がした。

「なんてね。決まりなんだ」

「決まり？」

決まりって何？ と聞こうとしたが、先に向こうが喋り出した。

「こんなところで寝かせて悪いね」

「それは、僕が言うことじゃないのかな、と思うんですけど……」

僕は一応個室にベッドがあるけれど、この人、通路で床に寝ている。

とりあえず寒いので、ベッドから毛布を引っ張ってくる。翼が邪魔で、布の隙間が寒
いし壁に背中を預けられない。不便だなあと思いつつ、スレインは肩でドアにもたれた。

扉越しに、時折振動が伝わる。向こうもドアにもたれて座っているようだ。

「ねえ、君はどこから来たの？」

金属製のドアの震えを肩に感じる。

「家から……」

「そうじゃなくて、どういう世界？」

答えの言葉を、強い調子で遮られる。

「どういうセカイ？」

どういふ世界と言われても。世界なんて一つしかないと思うのだが。

いや、待てよ。

スレインはぼん、と手のひらに拳の小指側を乗せる。

「セカイケイというやつですね！ えっと、オレンジさんはチュウニビヨウなんですか？」

え、と戸惑い気味の呻き声が聞こえ、次に。

「これが世界系なのか……」

という複雑そうな呟きがあった。果てしなく横たわる沈黙。何か、まずい事を言ったっぽい。

やがて呆れたようなため息が聞こえた。

「君はさ、ここが何の施設かわかる？」

それは、実はずっと考えていた。スレインは顎に指を当て、左上の天井のあたりに視線を送った。カビのような黒ずみがある。

「さあ……？ 病院にしては殺伐としていますし、研究所にしては機械や装置がないですね。建物は古いですし」

変なテストや検査がおなじ建物で毎日ある。明日も、多分そうだろう。痛くはないし辛くもないが、病院って感じじゃないし、なんだか薄気味悪くて怖い。

普通の場所ではない、ということくらいは僕でも分かる。映画やドラマの、牢屋みたいな場所だ。

「ここ、なんなんですか？」

スレインが聞くと、すぐに答えが返ってきた。

「君の家だよ」

「僕の家え？」

意味がわからず高い声でリアクションしてしまった。扉の向こうからは、うん、とい

う淡々とした声。

「君に似た人がここにいたんだ」

前に、そんなことを言っていた。ここは、その人の部屋なのか。

改めて部屋を見回す。暗くて、狭くて、何もない。私物のようなものは何も。

「君が来たら、いなくなった」

こんな、さみしい場所に人がいたんだ。

「その人は、こんなところに住んでいたんですか？」

躊躇うような間があった。

「住んできた、っていうか。……生かされていた、かな」

「生かされていた……？ 病気だったんですか？」

「いや。でも、いつも死にそうだった」

「どうして？」

「どうしてかな……」

呆然とした声で呟き、それきり彼は黙ってしまった。無音だ。聞こえるのは、ほんの

時々、姿勢を変える時にする布の擦れる音だけだ。こんなに静かな場所が存在するなんて。

「多分、僕のせいかな」

やがてぼつりと聞こえた言葉は、独白めいて掠れていた。それを言った扉の向こうのこの人は、確か三歳年上だけれど、もっとずっと歳の離れた人のような気がした。

「え？」

「いや、それはいいんだ。君に話しておかないと、と思つて」
すつ、と息を吸う音がした。

「もし彼が戻らなければ、ここが君の家になるんだ」

「……え？」

僕の家？

先程の、彼の言葉が蘇る。

『君の家だよ』

ゾツとした。背筋が氷を落としたみたいにぞわぞわして、翼がぶるぶると震える。

「代わりが必要なんだ」

感情を排した声は、理性的で凍りつくように冷たいく感じる。

「代わり、って？」

ごん、と音がした。目の高さ。扉に何かが当たった。

「君は似てる。最初は、全然似てないって、別人だっと思ったけど。今では、そうは思えない」

語尾が小さく弱くなる。

「もしも戦争がなければ。君みたいな、気弱でちょっと抜けてて、食いしん坊でチエスが強くて。……よく笑う、底抜けにお人好しの、普通の子どもだったんだ」

スレインは扉を手のひらで押した。びくともしない。立てた爪がキィ、と神経に触れる音で金属を引っ搔く。

「何の話をしてるんですか？」

「ここにいた人の話」

「その人と、僕に、……なんの関係があるんですか？」

「関係はないよ」

一呼吸の間。

「ただ、似てる。それだけ」

それだけ、という声はあまりに平坦だ。スレインは膝を抱えた。

「僕は、どうしたら……」

「その翼で、飛んでいく？」

「へ？」

「冗談だよ」

からかわれている、と腹が立つ。こんな時に、冗談もないだろうに。

「こんなの、重いだけで飛べませんよ」

「そう」

翼を触る。骨があり、羽がある。握ると少し痛い。動かそうとすると、ほんの少しだ

け開く。

空を飛べたらいいなって、考えたことはあったけど。翼がほしいわけではなかった。

「オレンジさんは……」

「伊奈帆」

「え？」

「僕の名前。界塚伊奈帆」

カイヅカイナホ。ファーストネームが後だから、東洋系なんだ。

「カイヅカ、イナホ……」

名前を覚えてくれた。嬉しいけれど、少し悲しい。結局、僕は僕なんだ。心の芯から
思い知る。

誰かの大事な人になれない。

誰かの帰る場所になれない。

大事な人には、僕より大事なものがある。

「イナホさんは、その人のことをどうしたいんですか？」

思いがけず強い声が出た。ドアが軋む。向こう側の背中が離れた。

「どうしたい、って？」

きつと、こちらを向いている。分厚い扉は顔を見るには邪魔だけれど、顔を見たらきつと怯んで言えないだろう。

「その、僕に似てる人、閉じ込められていたんじゃないですか？ この部屋、内側から開かないんです。多分ですけど、牢屋かなんかじゃないんですか？ 戻ってきたら、こんな暗くて寂しい場所に、また閉じ込めるんですか？」

一息に捲し立て、きつ、とドアの向こうを睨む。そこにあるはずの、右側の赤い目を。

「今、その人は自由なんじゃないですか？」

イナホさんが、息を呑むのがわかったが、僕は続ける。

「戻ってきてほしいんですか？ それって、その人も望んでいることなんですか？ その人は、嫌になって出て行ったんじゃないんですか？」

はあ、はあ、と肩で息をする。胸が苦しい。呼吸がしにくい。頭がふらふらして、床に手をつく。ぽたぽたと雫が落ちた。

やがて、コン、と一つのノック。

「君が言うなら、そうなのかもしれないね」

とても優しい声だった。喉がつまり、目が熱い。頭が割れるように痛い。

「それで、どうするの？」

見えないけれど、声のする位置か、彼はきつと膝をついているのだろうと思った。

「彼が戻らなければ、君はずっとそこで身代わりになるんだよ」

容赦なく、扉の向こうの男は続ける。

「赤の他人の自由のために、犠牲になってもいいってこと？」

次の言葉は間隙なく。

「無関係の君が」

現実感に鳥肌が立つ。変な夢みたいな数日だった。見知らぬ場所で、見知らぬ人々。荒唐無稽な非日常。

非日常が、日常に取って代わろうとしている。平凡な高校生から、翼を持った囚われ人に。

スレインは首を振る。

そんなの嫌だ。嫌だけれど。
でも。

「嫌だけど、仕方ないと思います」

もう、痛くない。床についた手を離す。頭はすっきりしていた。

「どうして、そう思うの？」

静かで穏やかな声だった。

「よく分からないですけど……。あんまり、前と変わらないし」

こんなになちゃんと、話に付き合ってくれる人は初めてだ。ぶっきらぼうだし、僕を子ども扱いするところはあるけれど。

「父は仕事ばかりで家に全然帰ってこないし。転校ばかりで、一人には慣れてますから。ここは、どういうわけか皆さん優しくしてくれます。こんな翼があっても、無視とか、

いじめたりしないし」

自由かどうか、なんて僕にはあまり意味がない。一人の自由は、すぐくさみしい。

「だったら、まあ、いいかなって」

名前を呼んで、笑ってくれる人がいるのなら。空なんて、見られなくても。

「……なんなの、それ」

どきりとする声。これまでの、冷たく静かな声ではない。

「家に、帰りたくないの？」

怒気がこもった声に思わず笑みが浮かぶのは、多分、この人、今は僕のことを考えてくれているからだ。

「どうせ一人だし、友達もいないから」

ガチャ、ガチャリ、とロックが回った。

伸ばされる腕。逆光に立つ影は大きく見えた。隻眼の右目が真っ直ぐ見下ろす。

「行こう」

握った手には、硬いタコがいくつもあった。

White03

朝食の片付けを終え、布巾で手を拭く。エプロンをいつもの通り自席の笠置に縦に畳んでかけて、伊奈帆の視線が窓際へと向く。

土曜日の朝。五月の眩しい朝日を受けて、羽根の一枚一枚が燐光のように輝いている。片膝を立てた楽な姿勢。傍には数冊の本が積まれている。あれは辞書だ。

気がつくと、コウモリはいつもそこに座っている。

「何見てるの？」

洗濯物が溜まっているな、と頭の端で思いつつ、伊奈帆はふと気になって聞いた。コウモリは曲げた膝の上に本を開いたまま、明後日の方向を眺めてぼうっとしていたからだ。

「別に、何も」

緩慢に首を振り、彼は視線を本へ落とす。伊奈帆はゆっくり歩み寄り、翼の分だけ大きな影が広がる床に腰を下ろす。

二人の間に本の山。一番上の和英辞書を無意味に開き、パラパラ捲る。平易な日本語と、幾つかの英単語。ある箇所がストンと胸に落ち、そのページは開いたまま固定された。

「あのさ。コウモリ」

開いた辞書の片隅にあるのは、——ぼうめい——political asylum——

「ん？」

眩しい。それは朝のせいだけではない。

この人は、多分。

本当なら。

「どこから来たの？」

手の届かない人なのだ、と瞳の深さに思い知る。

「どういう意味だ？」

逆光のコウモリの横顔が、あまりに鋭利で一瞬たじろぐ。

「そのままの意味。どこから来て、どこに帰るの？」

彼が亡命者だというのは、あまりに相応しく思えた。
身体の傷痕も。

薄青の簡素な服も。

名前を覚えてくれないのも。

それは全て、彼が追われているから、または囚われていたからではないのか。

「それを聞いて、どうする？」

これまで聞いたことのない、冷たい声だった。心臓が早鐘を打つ。こめかみに汗が伝う。

「どうもしない。ただ」

喉がかれて、声が思うように出ない。唾を飲み込み、目を合わせ、そして伊奈帆は口を開く。

「会いに行けるところかな、と思って」

時が止まったような静けさ。レースカーテンに透ける陽光の柔らかなさが不釣り合いだ。カチ、カチ、カチ、と隣の部屋の時計の秒針が聞こえる。壁の向こうで、自動車のエン

ジン音が遠ざかる。

コウモリはふつ、と息を吐き、両目を閉じて天井を仰ぐ。体重を壁に預け、脚を投げ出し左腕で目元を覆う。

「ああ、もう。そういうところなんだ」

呆れたような声音に混じる複雑な色。伊奈帆は何も言えずに少し開いた唇を見る。乾いて皮がめくれている。

「……なあ、伊奈帆」

「何？」

コウモリは腕を下ろし、床に手をつき姿勢を変える。重心を前に、伊奈帆の方に半身を向けた座り方。

その顔は、優しく微笑んでいた。

「僕は、お前が考えているような人間じゃない。狡くて、卑しくて、人に対してどこまでも非道になれる」

少し細めた、泣き出しそうに潤んだ目元。眉は優しいカーブを描き、口元は静かに言

葉を紡ぐ。

「そしてそれを、繰り返す」

右手の拳が握られる。関節が真っ白になる。俯く顔。目が髪に隠れる。

「罪深い人間なんだ」

重く深く、その独白は部屋を満たす。

低く柔いその声の響きは絶望だ。世界中から、色が無くなる感覚に陥る。

「そうは思えない」

伊奈帆の言葉にコウモリは顔を上げた。力なく首を振る。

「お前は、僕の汚いところを見てないからだ」

「そうかもしれない。でも、違うと思う」

ノーを繰り返す伊奈帆をコウモリは睨む。

「お前に、僕の何がわかる？」

怖い顔と言葉だが、その声は静かで優しい。伊奈帆は言葉を探し、視線が彷徨う。窮屈そうに畳まれた白い翼。きつく握られた拳。頼りない踝。伊奈帆が繕った跡が見える

オーバーサイズの青い服。首元の、暗示めいた銀の鎖。

引き結んだ、渴いた唇。蒼白な頬。

言葉を待つ、硬玉にも似た碧の瞳。

そこに映る、彼にとつてはおそらく異邦のこの世界。

「知らない。名前も。何も。……でも」

咄嗟に手が伸び、握り拳の手首を掴む。力を込めると中指の第一関節まで回る。細い。けれど、人の温度と脈動がある。

「僕は、何も知らないけど。それでも、あなたが、傷ついているのは分かる」

見開かれる目に揺らぎが見えた。炎の温度変化のように移ろう瞳は、なんて綺麗なんだろう。

「伊奈帆……」

我に返り、手首を握る力を緩める。前に傾いた重心を戻す。

「なんか、ほっとけなくて」

手を離す。コウモリは腕を上げ、握られていた手首をじっと見た。指の形に、少し赤

くなっている。

「……そんな価値はない。僕には」

途方に暮れた声だった。伊奈帆は膝の上で自身の拳を強く握る。手のひらに爪が食い込む。

どうしたらいいんだろう。

——罪深い人間なんだ。

罪とか、そんなの。考えたこともない。

汚いとか、そんなの、わからない。

見てきた世界が違いすぎる。

ぶつり、と手の内側の皮が切れた。爪の間に血が入り込む。

言えることも、できることも何も無い。

なんて無力なんだろう。

それでも、言わなければ。

「僕は、……力になりたいって思う」

何もできないかもしれないけど、と続ける。

「ほうっておけない」

翼がびくりと震えた。白い羽根が一枚、窓の近くに花びらのような速度で舞い落ちる。

「……もう、何も言わないでくれ」

翼の主は顔を歪ませ、顔を窓の外へと向けた。

Black03

「え……。あれは……。月、ですか……？」

車窓から眺めた空が思わぬ様相だったので、スレインは問いかけの形で声を上げた。悪路に入り、タイヤが軽くバウンド。振動で前のめりになり、翼が変な形に曲がる。眩暈がした。左右に頭を振り、再び夜空に目を向ける。

「月を見た事がないの？ 太陽を見たことがない、ならわかるけどね」
運転席の伊奈帆が前を見たままそう言った。

「太陽を見たことがない？」

スレインは、意味がわからず聞き返す。伊奈帆がちらりと横目を返す。それは左眼。彼は今、眼帯を外していた。

「ほら、吸血鬼とか」

「はあ？」

伊奈帆がぷっと吹き出す。

「軽く流して。冗談だから」

「え、冗談？……わかりにくいです」

「そう？」

「真面目な顔して言うから……」

「君、騙されやすいタイプだね。流されやすいっていうか」

「それ、貴方がいいですか？」

スレインはじいっと伊奈帆の顔を睨んだ。目つきが悪いと自覚しているが、伊奈帆は涼しい顔でハンドルを操作している。

サンドカラーの大きな車に押し込まれ、先ほどの施設から遠ざかっている。最初は海辺、今は山中。道はどんどん細くなり、木の葉や枝、石など色々なものがフロントガラスにぶつかって、不規則的な音を立てる。

「ヘヴンズ・フォール」

ヘッドライトの明かりに照らされる真っ暗な森を見ていたスレインは、耳に届いた言葉にはっとし隣を見る。静かな横顔が進行方向を見つめていた。

「へヴ……？　なんですか、それ」

小石が右フロントに跳ねた。この森の動物たちは、一体どうしているだろう、とふと思う。四輪駆動の大型車が、地面を削り草木を傷つけているのだ。突然の乱入者に逃げ惑っているかもしれない。何も悪いことをしていないのに。

「戦争だよ」

伊奈帆の声は普段の通り淡々として、冗談を言った時と同じ声。でも、これは本当のことだ。その横顔が、僅かに憂いを帯びたから。

その一言で様々な疑問が線となって繋がった。この車は、軍用車なのか。この人は、軍人。さっきの施設は軍用施設。そして――。

「僕に似た人は……。何を、したんですか？」

あの狭く暗い部屋は独房だ。

囚われていた。

それは多分――。

息を吸う音が聞こえた。声が耳に届くまでのレイコンマが途方もなく長く感じる。

「世界を変えようとして、戦った。クレバーなのに捨て身で、そして勇敢だった」
世界……。そんな大きなもの、変えようなんて考えたこともない。

「でも、負けた」

カン、と飛び石が跳ねた。

「誰に？」

スレインは聞く。

「僕に」

伊奈帆が答えた。

『多分、僕のせいかな』

扉越しに聞いた言葉を思い出す。戦争があつて、この人は戦った。僕に似てると言う人。世界を変えようとした人と。戦い、勝った。そしてそのことに責任を感じているのだ。そうでなければ。

『生かされていた』

なんて、言わない。後になって、死なせてやれば良かったと、後悔したのかもしれない。

「翼があるのに、飛べないなんてかわいそう」

はっとして、隣を見る。伊奈帆の口元に微笑が浮かぶ。

「そう思う人は、優しいんだ」

「え……？」

右目がこちらを一瞥する。年齢よりもずっと上の、色んなことを知りすぎた老人みたいな目の色だった。

皮肉げな笑みを浮かべたまま、彼はハンドルを大きく切った。車体が傾き、翼が反射的に動く。それは飛ぶための動きではない。

「僕は、飛べないことにほっとする。ひどいよね」

夜の森を抜けた先には、一体何が見えるのだろう。

朝焼けの近い仄青い空気の中、廃村にたどり着いた。道路のアスファルトを草が割り、畑は荒れて、民家の窓は割れている。崩れ落ちた家もある。変な焦げ跡が壁や塀に残っていた。

車は駐車場に停車した。緑の屋根の建物で、字の消えた看板がある。民家では無さそうだ。

「降りて。少し休憩しよう」

伊奈帆の言葉に従って、スレインはシートの固定ベルトを外した。車のドアを開け地面に飛び降り、思い切り深呼吸する。朝の冷気が心地よい。翼が背伸びをするように左右に動く。こっち、と呼ばれて歩き出す伊奈帆の背に駆け寄る。

扉が開くと、ガラン、と音がした。古めかしいドアベルだ。内装を見渡す。テーブルイスのセットが三つ。カウンター。その内側の棚。洒落た作りの吊り下げランプ。いつものだかわからない、立方体の巨大なテレビと白い猫の置き物。

喫茶店だ。しんとして人の気配はないけれど、埃は薄く、片付いている。

「あの、ここは」

伊奈帆はカウンターの内側でしゃがんでいる。スレインは彼に外側から彼の側へ歩み寄る。

「秘密の場所。疲れたでしょ。お茶でも飲もうか」

そう言って立ち上がり、カウンターにナイロン製のバッグを置いた。ジー、とジッパを開き、手際よく中身を並べる。アルコールストーブ。ステンレスのケトルとセラカップ。黄緑色の缶。

マッチを擦り、アルコールストーブを点火する。橙色の炎の色にほっとした。

「キャンプみたいですね」

伊奈帆が袋に入った水を小さなケトルに移し、火にかける。

「電気は引いていないんだ」

朝を待つ時刻。壁は崩れ、草木が覆う廃村の、緑の屋根の喫茶店で炎を挟んで向かい合う。お湯が沸くのを待ちながら。ここには、自動販売機もコンビニもない。電気もないし、人は僕らしいかない。

変な夢みたいなのシチュエーション。現実じゃあ、ないみたいだ。

「戦争のせいだよ」

スレインは伊奈帆を見る。俯き加減の彼の顔は、炎の色を照り返している。

「建物がぼろぼろで、地割れがあつて、人がいないのは」

「どうしてそんなところに、食料や備品が用意してあるんですか？」

「乗り物も、だよ」

蒸気が注ぎ口から白くたなびく。伊奈帆は円筒形の缶の蓋を開け、揺すって茶葉をケトルの中に入れた。

「軍用車は目立つ。ここで乗り捨てて、軽バンで次の場所へ行く」

次。思いもよらぬ言葉にスレインは腰を浮かす。

「他にも、こんな隠れ家があるんですか？」

伊奈帆はケトルの中身をカップに注ぐ。ふわり、と嗅ぎ慣れないお茶の香りが広がった。

「あるよ」

「どれくらい？」

「必要な分だけ」

伊奈帆がカップをスレインの前に一つ置く。スレインは椅子に座り、湯気の立つカップを持ち上げた。浅いカップの底に茶葉が見える。炎の近くに寄せると、緑色のお茶だとわかった。

「君のために、使うことになるとは思わなかったな」

伊奈帆が呟くのが聞こえた。一瞬動きが止まったのは、言ったことをまずいと思ったのかもしれない。だから、スレインは何も言わなかった。

「でも、仕方がない」

ほうっておけない、と彼は小さく呟いた。ちらちらと、炎の影が揺れている。

ドアを開け、目に飛び込んだ光景に靴も脱がずに駆け出す。リビングを突っ切って開け放たれた窓の向こう、ベランダへ。

「うわ！」

突進するように、背中から飛びつき胴体に両腕を巻く。自分の肘を握りしめる。肩甲骨の翼の間に額を押し付け両膝を少し曲げて踏ん張る。白い羽根が舞い散った。

加速度的にも、心理的にも、抵抗はない。そのまま静止していると、羽交い締めにした身体力が抜けた。

「伊奈帆……？」

戸惑いがちに名前を呼ばれ、早とちりに気づく。鼓動の速さ大きさが徐々に定常へ戻る。学校から帰ってきて、ドアを開けると部屋の奥から風が吹いた。ベランダに出る掃き出し窓が全開で、カーテンが左右に広がって。その向こうに、広げた白い翼だけが見えたのだ。

飛び降りるか、と思った。

だから必死で飛びついたけど、どうやらそうではなかったようだ。しかし、腕の拘束を解く気にならず、伊奈帆は翼の付け根に顔を埋めた。そして自身の思考の可笑しさに気づく。

飛び降りる、なんて。翼があるのに。

「……どうした？」

コウモリの声。どうして抱きついたか、わかっているだろうに。

翼があるなら、飛び降りるわけがない。飛び立つのだと、僕が気づいてそれでも手を離さないことに。

腕に力を込める。軽く肘まで回ってしまうこの身体は、なんて細くて薄いんだろう。重さがあるとは信じられないくらいに。

「ここにいて」

自分のものとは思えないほど、切羽詰まった声だった。翼に包まれ目を閉じる。耳の周りや首筋を羽が撫でる。触れた感じが溶けそうに柔らかくて、なぜだか無性に泣きそうになる。

「行かないで」

絞り出すように言った言葉は掠れてほとんど音にならない。でも、彼には伝わった。躊躇いの空白の後、返事があった。

「……ごめんな」

それはできない、と小さな声で、しかし彼ははっきりと言う。

鳥だ。

空を見る時間が長くなった。最初は室内で眺めていたが、人通りは少なく、何より階層が高く下からこは見えないのだと気づいてからはベランダの手すりに肘を置き、ぼうつと空を眺めている。こんなに長閑で退屈な時間は、生まれて初めてかもしれない、とスレインは思う。

一羽の白鳥が青い空を斜めに横切っていく。迷いのない単独飛行。角度を徐々に増して、ほとんど垂直に飛び上がる様に目を奪われた。

たった一羽で天空を目指すその鳥は、まるで何かの暗示のようだ。

『じゃあ、クイズだ』

ふつ、と脳裏を過ぎる声に眉を顰める。急に出てくるな、と文句の一つも言いたくない。

界塚伊奈帆。お前は本当に、僕を怒らせるのが上手いな。

『ずぶ濡れなんだ』

髪も肩も、額も頬も濡れていた。忘れていた“外”の匂い。騒々しさと苛立ちと、ほんの少しの羨望とともにあいつは無遠慮に内側へと入り込んだ。

『鳥はなぜ飛ぶのか』

あんな風に飛ぼうと思った。

高く飛んで見渡せば、何もかもわかるようになると思った。

そしてわかった。

どんなに高く飛んだところで、何もわかりはしないのだ。

高く飛ぶほど、呼吸は苦しく、大気は冷たく。休むひと枝すらない虚空。そこにあるのは、孤独という言葉では足りないくらいの虚しさ、痛みだ。

『鳥はなぜ、空を飛ぶのか』

口ではそう問い、瞳はこう問う。お前はもう飛ばないのか、と。

スレインは首を振る。誰に見せるわけでもないのにそんな動作をしてしまうのは、誰かに聞いてほしいからなのかもしれない。

面白くない事実だが、できれば、お前が聞いてくれ。

「飛べるはずがない」

落ちた鳥が、また飛ぶとはどういうことか。界塚伊奈帆は、それを知らない、考えない男では、決してないのに。

「あいつ、どうしてるかな」

お前と同じ顔をした、同じ名前の少年が、僕に言った。

『ここにいて』

『行かないで』

飛んでいってくれるな、と懇願するその声が、お前と同じ声だから。だからつい、勘違いしそうになる。

「わかってるさ」

忘れちゃいけない。面会室の雨の匂いと鳥のこと。お前が言ったあの言葉。

『それでも君は、探し続けるんだ』

生きる意味を。生きること。

「戻らなきゃいけない」

お前のいるところへ。そこでなければ、きっと僕は生きられない。ここには、足りない。僕の。

犯した罪が。取り返しのつかない過去が。何より守りたかったものが。

そして、終わりのない責苦と表裏一体にある、ようやく開けた僕の未来が。

カチャリ、とシリンダーキーの回る音。蝶番の軋む音。足音、衣擦れ、そして声。

「コウモリ、いる？」

スレインは声に振り向く。

「ああ、おかえり」

明らかにほっとした表情で、「伊奈帆」は靴を脱ぎ室内を突っ切りこちらにやってくる。学生靴をソファに放り、スレインの左隣で手摺りに左手を置いた。

そのまま二人とも、何も言わずに思い思いのものを見ていた。スレインは、幼さの残る伊奈帆の横顔と手摺りを掴む手を。伊奈帆は空を。

ぎゅ、と手摺りを手が握る。

「あかさ」

伊奈帆がスレインに顔を向けた。真っ直ぐな視線。スレインは逸らさずにそれを受け止める。

「約束してほしい」

「約束？」

聞き返すと、伊奈帆はうん、と頷いた。こんな仕草にはっとする。同じなのだ。伊奈帆と。

「いなくなる時は、ちゃんと僕に言って」

真剣な声は、語尾のあたりが震えていた。スレインは言葉を探す。きちんと答えてやりたいのだが、いい言葉が出てこない。

「……そのうち、いなくなる」

「それはわかるよ」

「そんなに遠くない」

「それもわかるけど」

そうじゃなくて、と伊奈帆は少し俯いた。口を尖らせ、そっぽを向く。

「急にいなくなったら、寂しいから」

年下だったつけ、と彼の年齢を思い出す。本来よりもっと幼い、まだ子どもと言っている年頃。彼は学校に通っているのだ。

スレインは伊奈帆の後頭部に手を当てた。上下に動かす。丸い頭蓋と硬い癖毛の感触に笑みが浮かぶ。

戦争を知らない子どもなんだ。

「できるだけ、そうする」

「……子ども扱いしないでほしいな」

「子どもだからな」

「……バカコウモリ」

コウモリ、か。

頭を撫でつつスレインは思う。

あの頃。星の海を誰よりも速く飛んでいた。鳥ですらないのに、あんなに速く高くずっと先まで飛ぶことができた。

でも、今は。

「心配するな」

飛ぼうと思っても、鳥の翼じゃ飛べないんだ。

地平線の見える平原が、日本にもあるとは知らなかった。

舗装されていない土の道。その左右には緩やかに陥没した土色の大地と、ところどころに丈の短い草が群生している。遙か彼方に薄ぼんやりと都市の亡骸がある。

軍用施設を抜け出し既に三日。この世界で七日目の朝。道中の移動手段は軍用車は軽バン、バイク、トラック、自転車。そして、今は左ハンドルのオープンカーへと移り変わっている。

「どうして、こんな派手な車なんですか？」

乗り換えたのは昨日の深夜。港町の、錆びたトタンの崩れ落ちそうなガレージに、流線型のスポーツカーがあることにあまりにも驚いて、その時は聞きそびれてしまった。

視界に入る長いボンネット。日の出とともに明らかにになった車体の色はパール・

ブルー。よく手入れされてピカピカだが、光の中でよく見るとデザインはかなり古めかしい。ギアハンドルや操作系にはかなり年季が入っている。

伊奈帆が答える。

「死ぬまでに、一度くらいこんな車に乗ってみたいくて」

「死ぬまでに、って……」

スレインが呟くと、伊奈帆はやれやれ、といった表情でこちらを見て、すぐに前へ顔を向ける。

「いちいち引かからないで。半分は冗談だから」

半分は冗談。ということは、もう半分は本気なんだ、と。スレインはどこまでも続く地平線を見て考える。

あのクレーター。ここも、かつて戦場だったのだ。伊奈帆は、そういう場所を移動している。なぜだろうか、と考える。人がいないから。ではなぜ、人がいないのか。死んだから。なぜ避難した人々は戻ってこないのか。

それはおそらく、危険だからだ。

戦争。どんな兵器が使われたのだろう。目に見えない毒のようなものが、残っているのではないか。

だとするならば、この旅は死へ向かう旅。遠くない終わりを内包した逃避であるのではないか。

『君のために、使うことになるとは思わなかったな』

彼の言葉が今更ながら胸を刺す。僕のための準備ではない。彼は、自らの死と、相手の生命をも引き受ける覚悟をして時間をかけて整えておいたのだ。

今ここにいるべきは、僕ではない。だって、僕は。

戦いなんて知らない。無力な、ただのひとりぼっちの高校生だ。

「大丈夫だよ」

はっとして、顔を向ける。優しい声。そして、優しい横顔だ。

ハンドルを握る手は、背丈や面差しとは意外なほどに大きく無骨だ。関節のところで、硬そうな部分がある。

伊奈帆は続ける。

「満月が見られる。お父さんは生きている。学校だって、そんなに悪くない。チェスの部活があったら入れればいいし、強いやつと友達になればいい」

旅立ちの日の、彼との会話を思い出す。

『もしも戦争がなければ。君みたいな、気弱でちょっと抜けてて、食いしん坊でチエスが強くて。……よく笑う、底抜けにお人好しの、普通の子どもだったんだ』

この人に、僕はそんな風に見えたんだ。

それは、なんか、ちよつとむかつくけど、すごく幸せなことなのかもしれない。僕は戦いを知らないし、戦争なんてわからない。そんな世界を生きてきた人が、僕を受け入れてくれた。

「だから、仕方ないとか言わないでいい」

よく覚えてる。僕が言ったこと。もう口癖になっていた「仕方ない」。なんだか、変わる気がした。

「嫌なことから、逃げていいんだ。声を上げて、泣いていいんだ」

White to Black

翼が震えた。

「……くっ、……う」

凄まじい違和感にベランダの手摺にもたれかかる。そのまま膝を折り、スレインは蹲る。痛みはない。だが、とても気色悪い。羽根が、翼が。細胞の一つ一つが別の意思を持つ生き物のように蠢く。

そして、色が変わる。

純白の翼の一羽一羽が漆黒へと。

そして知る。

全てのことを。

目まぐるしく切り替わる映像。見慣れた世界と、知らない世界。もう一人の自分。

「ああ、……そう、か。そうだったのか」

そして知る。今知覚したその全てが、翼とともに失われるであろうことも。

翼を動かす。風が起こる。カーテンレールの留め具がパチンパチンと外れ、室内で何かが立て続けに倒れる音がする。

今なら飛べる。

いや。

今しか、飛べない。

肩越しに見る一室。この七日間、ここが僕の居場所だった。

『ここにいて』

『行かないで』

『いなくなる時は、ちゃんと僕に言って』

銜いなくこちらを見つめる肉眼の両目。夕焼け色の虹彩に星の散る、純粹な瞳。

羽ばたきは、知っていた。ベランダの手摺に裸足の足が乗る。金属の匂いが力強い風に消える。

二度目の羽ばたきの前に、スレインは固く目を閉じた。

「ごめん、伊奈帆」

さよならは、言えそうにない。

『え？ それって……。なおくんのカノジョ……。？』

「違う」

曇天の、学校からスーパーを経由しての帰路。伊奈帆はエコバッグを肩に掛けた右耳にスマートフォンを当てつつ即答。横断歩道の信号が赤ランプ。立ち止まる。

『でも、紹介したい人って』

左右のエコバッグはネギが飛び出し、大きく膨らんでいる。よいしょ、と姿勢を整え持ち直した。今日は出張していたユキが帰ってくる日。

「うん。……あのさ、ユキ姉」

『なに？』

伝えなければならないことがある。

空から落ちてきて。

怪我をしていて。

行くところがなくて。

帰り方も、わからない。

読書が好きで、料理の超初心者で。皮肉屋で優しい、孤独なコウモリのこと。

背中に翼のある人間のことを。

きつと、驚くだろう。最初は怒るかもしれない。どうして、もっと早く言わないの、と。

そして、全てわかってくれるだろう。

伊奈帆は目を閉じる。思い出すのは施設にいた頃。いじめっ子。無関係を決め込む子ども。僕の言い分を聞いてくれない大人たち。

そんな中でも、ユキはずっと味方だった。

変わり者の弟のことで、悩んでいたのを知っている。

それでも、味方でいてくれた。

「……いや、会ってから話すよ」

『ええっ？』

「じゃあ。今日はハンバーグだから」

『あ、やった！……じゃなくて、なおくん！紹介したい人って……！』

「じゃあね」

『ちょ……！』

ピッ。

ずっと、僕の味方でいてくれた。

だから、今度も大丈夫。

コウモリのこと。

ユキ姉は、僕の姉さんなのだから。

パッ、と信号のライトの色が切り替わる。伊奈帆は歩き出そうとした。

曇り空。

なのに、影が落ちる。

ふと、空を見た。

「鳥……？」

上空に、黒い影がある。

いや、影、と思うがそうじゃない。翼の色だ。黒い翼。広げた翼の全長はとても大きい。

「……コウモリ？」

あれは、あの黒鳥は、コウモリだ。理屈はない。でも、それしかない。行ってしまう。

飛んで行ってしまう。

滑空の翼。

その黒い翼が。羽根が。

黒い羽根が。

パッパッパッ、と信号の点滅。
パラパラパラ、と黒い羽根が。

まるで、鱗のように、剥がれて。

——落ちる！

バサリ、と買物袋が地面に落ちる。

「コウモリ!!」

伊奈帆は駆け出した。

Black to White

「嫌なことから、逃げていいんだ。声を上げて、泣いていいんだ」

その瞬間、黒い翼が大きく広がり、羽根の一本一本が立ちあがる。それらは燐光を放ち、一羽一羽と色を変える。

伊奈帆は眼を瞠る。アナリティカル・エンジンが、解析不能のエラーを脳へと伝達する。

大きく広がる両翼は純白。そう、まるで――。

まるで、――天使。

体積を増した両翼は、風を受け羽ばたきに似た動きを見せる。

「翼が……」

スレインが呟き、翼が意志を持って動く。

翼を広げ、風を受け。

目を細める。

目が合った。

瞳が語る。

——飛びたい、と。

伊奈帆は走行速度を上げる。スレインは助手席で立ち上がる。向かい風を翼が受ける。加速度に決して折れる気配のない、強くしなやかな白い翼が。

この空は。

レイリー散乱の青は。天国の青、ヘヴンリーブルーは。

——天使の帰郷に相応しい。

伊奈帆は聞く。

「今なら、飛べる？」

「……はい」

少しの間の後、スレインは頷く。もう、前しか見ていない。

「なら、行つて」

右手を伸ばす。手を握る。華奢な、柔らかい手だ。

まず、背中。次に膝。爪先。胴体が水平になる。

握る手は、温かい。

ばさり、ばさりと白い翼が躍動する。羽根が数枚散り、すぐに後景へと消える。

「……オレンジさん」

「伊奈帆だって」

腕が伸びる。伸び切る。

「あ、イナホさん……」

握る手から、手のひら、そして指が逃げる。

「戻ってきますよ」

眉尻を下げ、両目を細めた、はにかむような笑顔は。

「僕に似た人」

“スレイン”に、よく似ている。

Black and Orange

「故障か？」

昇降ボタンを連打するが、エレベーターが動かない。伊奈帆は外階段を駆け上がる。金属製の踏み板がカンカンカン、と甲高い音を立てる。

黒い翼が、パラパラと剥がれ消えた。

生身の身体が、落下した。

全速力で走ってきた。

ここへ。

伊奈帆の自宅からいくら先でない、住宅街の奥にある高層マンション。屋上目掛けて駆け上がる。息が切れる。心臓が痛い。こんなに走ったことはない。

間に合っていないのはわかってる。あの高さから落ちていたら、もう多分、どうしようもないだろうということも。

それでも。

足がもつれ、踊り場に膝をつく。地上は遠い。人が小さな黒い点に見える。今何階だ？ いや、構うものか。すぐ立ち上がり、再び駆け出す。

「コウモリ……！」

一人にできない。たとえ。

たとえもう、全てが終わっていても。

屋上。外階段との境は金属製の丈の短い柵だけだ。伊奈帆はそれを飛び越える。

「コウモ、リ……」

その刹那。

ゴオオオオオオオ、と。

海鳴りのような豪雨。

目も開けていられない。

視界が無くなる。

雨の海に溺れるようだ。

伊奈帆は反射的に顔を覆った腕を退ける。

世界の色が灰色になり。

世界が斜線で塗りつぶされる。

雨しかない、天に近いこの場所です。

「コウモリ……？」

見えない。わからない。

何も見えない。

何もない。

闇雲に歩く伊奈帆の足元を、雨に流され黒い羽根が通り過ぎる。

ここには、何もなくなつた。

「ちゃんとやってって、……言つたじゃんか」

けど多分、こうなるだろうと思つていた。

雨の雫をぐくりと飲み込む。

「……バカコウモリ」

雨って、しょっぱいんだ。

「じゃあ、行ってきます」

「いつてらっしゃい、なおくん。あ、傘は？」

「合羽あるから」

ガチャリ、とドアが閉まる。伊奈帆は空を見上げた。分厚い雲が太陽を覆い、眼下には彩度の低い街並みが広がっている。

今にも降り出しそうな曇り空。——あの日のような。

結局、コウモリは見つからなかった。ほうぼうを探して帰宅するとユキは既に家にて、その日は買い置き of 袋麺を二人で食べた。ユキはあまり多くを聞かずにいてくれて、その優しさが嬉しかった。

「あ、雨……」

登校中、住宅街を抜ける前に雨が降り始めた。伊奈帆は学生靴からレインコートを取り出し着衣する。そして再び歩き始める。

プー、とクラクションの音。雨の日は多いんだ。
ぷつぷつと、レインコートに雨粒が落ちる。

ざあざあと、地面に落ちる雨の音がうるさいな。
ぼんやりとした視界に入る、川の水が茶色く濁っている。

……ああ、そういえば。

この先の川べり。高架だったな。

傷だらけのコウモリが、空から降ってきたのは。
今なら、ちゃんと受け止めるのに――。

「なっ……!？」

「うわっ……!？」

その瞬間、コウモリめいた黒い傘が空へ飛んだ。

尻餅をつき、はっとする。人にぶつかった。こんなことは初めてだ。よそ見してたし、ぼうつとしていた。

らしくないな、と首を振る。謝ろうと、口を開き掛けた時。

「いててて……」

聞こえた声にどきりとする。ぶつかった相手もまだ立ち上がれないでいる。俯き加減の顔が上がる。伊奈帆は口をぽかんと開けた。

目の前にいる、僕と同じ制服を着た少年。

声が、同じで。

顔も、同じだ。

——あの人と。

「大丈夫ですか!?! お怪我は……!?!」

心配そうな顔で覗き込まれ、伊奈帆は慌てて立ち上がる。いや、そんなわけがない。声と顔は似ているけれど、よく見たらテンション高いし間抜け面だし。なんかほった丸っこいし。目とか、髪とか、眉毛の形とか、すごく似ているけれど。

ちらり、盗み見る。

やっぱり、違う。

何より。

そう、何より。その背には翼がない。

「……別に」

汚れを払い、背を向ける。爆発しそうな心臓を抑えて。

Heavenly blue

空の彼方に、白い翼が黒い点となって消えた。

「うわあっ!？」

ドシン、と車体が揺れた。急ブレーキで停車。ごん、とシートに何かがぶつかる。

「いつ、て……」

伊奈帆はその声に泣きそうになる。パーキングにギアを入れ、シートに膝立ちで後ろを振り向く。後部座席の床で頭を抱え、閉じられていた目が、ぱっと開き、伸ばした手を瘦せぎすの彼の手が握った。力を込めてその手を引く。重い。その重さが嬉しい。持ち上がった身体を力の限りで抱き締める。ぴったりくっついた心臓が、互い違いで少しずれたリズムを刻む。背中に手のひらで触れた。凹凸のある背骨のカーブ。両側に、硬い肩甲骨がある。肩甲骨しか、ない。

その背に、翼はなかった。

ただ、人肌と鼓動がある。

腕を緩め、肩を抱く。どちらともなく唇が触れる。乾いた唇は冷えていた。深く口付けると口腔は熱く、少し苦い。瞼を開くと、向こうも見ていた。至近距離の瞳は虹彩まではっきり見える。ガラスに入った無数のひび割れのような模様と、青く透き通る白目。

瞬きで、顔が離れる。伊奈帆は、太陽の光の下で“スレイン”を初めて見る。大人びていて、人相が悪く、病的と言える一歩手前まで痩せている。蒼白な額や頬に血管が薄く透けて、胸元の傷痕が生白く、人工照明の下より一層痛々しく見える。しかし伊奈帆に向ける目は穏やかで親しみの色を帯びていた。

風が髪を靡かせる。スレインは髪を押さえ、気持ち良さそうに目を細める。そして不思議そうに周囲を見回しこう言った。

「ここは、何処だ？」

伊奈帆は助手席のヘッドレストに手を置き一度空を見た。一面の青い空。美しいレイリー散乱。

高く、高く。両翼がどんどん小さく見えて、最後は太陽の逆光に消えた。
まるで、天使のように。

ここは何処か、というのなら。

「アララト、かな」

「は？」

スレインが怪訝な表情で口を開けた。何となく間の抜けた顔に見えて、伊奈帆は笑う。

「それよりさ、こっち座りなよ」

ぽんぽん、と助手席の座面をたたく。スレインは肩を竦め、跨いで前の座席へ移った。

「派手だが、古い車だな。こういうのが趣味なのか？」

「死ぬまでに、一度くらい乗ってみたいくて」

スレインは窓枠に肘を置き、横顔のまま伊奈帆を一瞥する。

「ふうん。意外だ」

「そう？」

「なんか、普通の男みたいだな」

「君の中では、僕って、普通じゃないわけ？」

スレインが鼻を鳴らした。

「普通の男は、話題作りに雨に濡れたりしないだろう」

口元に笑窪ができる。機嫌が良さそうだ。このアンティークな車が気に入ったのかもしれない。もしそうなら、目論見通りだ。伊奈帆はこそりと微笑んだ。

「じゃあ、行こう」

伊奈帆ギアをセカンドに入れる。最高時速は155 kmまで出るが、今はそれは必要ない。

「何処へ？」

スレインが聞く。

「さあ」

「さあ？」

「行きたい場所は、別がないよ」

「？」

アクセルを踏む。風が起こる。伊奈帆はトトン、と指先でハンドルを叩く。

「君と行きたいだけ」

ちらりと見ると、スレインは眉間に皺を寄せ、複雑そうな表情を浮かべていた。やがて諦めたようなため息をつき、シートにどっかり座り直す。

「馬鹿なやつ」

「普通で、馬鹿か。うん、悪くないかな」

「褒めてないぞ」

「知ってるよ」

僕を普通で馬鹿だと思いう人間は、多分世界で君だけだ。

「もっとスピード出ないのか？」

「今はゆっくり走りたい気分なんだ」

「ふうん」

会話は終了し、エンジンと風の音だけがする。地球の大地を切り取るように真っ直ぐ進む空色のオンボロ車。

フロントガラスに空の色が映り込む。そこを鳥が隊列を組み横切った。

「見て。鳥だ」

「ああ」

茫然とした顔と声で応えたスレインは、やがて笑った。

ゆっくり行こう。できるだけ。ここが始まりなのだから。

Epilogue

朝起きると、いい匂いがした。伊奈帆は寢室を出て、リビングの奥にあるキッチンへ向かう。カーテンは窓の両端で結ばれており、朝の光が明るく室内を照らしていた。

スレインがいた。コンロの前で、フライパンを傾けている。油を引く動きだ。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

伊奈帆が声をかけると、スレインは半身を向け振り向いた。調理台には、ボウルが一つと皿が二つ。皿には既に、楕形に切ったトマトが盛られている。

「ご飯作ってくれてるの？ 大丈夫？」

伊奈帆はスレインが料理を作れるとは思っていなかったもので、心配になってそう聞いた。スレインは呆れたような表情で肩を竦め、小首を傾げる。

「大丈夫だ。もうできるから。座ってろ」

コーヒーメーカーがゴポゴポと音を立てる。トースターもチン、と鳴った。

「うん」

確かに、全て出来上がるところ。出る幕はなさそうだ。伊奈帆は円形天板のダイニングテーブルの席につき、朝食を作るスレインの横顔を眺める。

窓から入る、涼しい風が心地よい。日本にしては、カラッとした爽やかな夏風だ。脱獄から、三ヶ月。

季節は雨季を過ぎ、夏も盛りの時期を越えた。伊奈帆とスレインは、道中見つけたある集落の一軒家で暮らしている。空き家が多く廃村かと思われたが、こぢんまりとした畑に野菜が実り、驚くべきことに人がいた。逃げなかった人たちだ。生まれ故郷から。戦地から。アルドノアの染み込んだ大地から。

クリーンなエネルギーかと思われたアルドノア。しかしかつての紛争地帯では、生態系に異常が出ていた。まだ調査中だが、人体への影響も少なくはない。つまり地球は、地球人は、アルドノアを受け入れることが出来なかったのだ。

人々は、皆、歳をとっていた。伊奈帆は事実とでっち上げが半々くらいの自分たちの事情を説明すると、彼らはにこやかに一員として受け入れてくれた。若い二人を働き手

として。人が去って間もない空き家の一つを融通してくれた。そこは小さな一軒家。屋根の色は、ペンキを塗ってそれほど経っていないらしく、鮮やかな青色だった。

そして、もう三ヶ月。それを伊奈帆は、とても長いと思った。毎日の一瞬一瞬を鮮明に覚えている。それは多分、今日が終わりかもしれない、と思って日々を過ごしたからだろう。

瞼を閉じる。スリープモードのアナリティカル・エンジンの僅かな光を知覚する。

もっと早く、終わりというのは訪れるのだと思っていた。

スレインが帰ってきた日。あの時思ったこと。もう、これで思い残すことはない、と。道程はアルドノアに汚染された戦地なのだ。かねてより、逃亡劇は追っ手に捉えられるより、この身体が駄目になることで終わると想像していた。今思うと、なんて独りよがりな思い込みだろう。

伊奈帆の予想と裏腹に、今のところ二人の身体に異常はない。火星の女神の加護だろうか。

スレインがコーヒーマーバーとカップを二つ持ってきた。

「なんだ、その顔」

「ん？」

それらを所定の場所に置きつつ言われた台詞に、伊奈帆は短い言葉で問い返す。伊奈帆は置かれたポットを持ち上げ、カップへ注ぐ。スレインは腰に手を当てた。

「へらへらして、しまりがいい。珍しいな」

伊奈帆の動きがピタッ、と止まり、何事も無かったように注ぐ動きを再開する。へらへら。しまりがいい。生まれて初めて言われた。

ことん、と軽くなったサーバーを置く。

「いや、なんか……」

スレインを見上げる。不思議そうな顔で、伊奈帆の言葉を待っている。

「幸せだな、と思って」

ふっ、と口をついて出た。言った後で急に恥ずかしくなってきた、そつとスレインの表情を伺う。

スレインは背を向けていた。ぎこちない動きでキッチンに戻り、皿を両手に二枚ずつ持って戻ってくる。

眉間に皺を寄せ、口をひん曲げている。怒ったような顔に見えるが、これは照れ隠しだろう。その証拠に、目の端がほんのり赤い。

「……ほら」

コトリ、と置かれた皿は、トーストと卵料理の二組。黄金色の半熟卵が日の照り返しできらきらしている。

スクランブルエッグだ。

「すごい。ちゃんと美味しそう」

「美味しそう、じゃなくて美味しい」

スレインはトマトケチャップとマヨネーズを卓上に置き、対面に腰を下ろした。両手を胸の前で重ねる。伊奈帆も同じ動作をし。

「いただきます」

「いただきます」

合掌の後、スレインはマグカップを、伊奈帆はフォークを持ち上げた。

スクランブルエッグを一口。

「本当だ、美味しい」

「だろう？」

というか、なんだ。本当だ、って。スレインが無然として付け加え、伊奈帆は返事の代わりにもう一度口に運ぶ。

ところとで、甘くて、すごく美味しい。

半分くらい食べた後で伊奈帆は聞いた。

「練習したの？」

初めてで出せる味ではない。こんな、ちゃんとした料理ができるというのは意外だった。

スレインは目を丸くして食事の手を止めた。そして視線を斜め上へ。どこかを見ているわけではない。

「んー……。した、……。のかな？」

「なにそれ」

伊奈帆は小さく笑った。スレインもつられたように微笑んで、食べかけのトーストを皿に置き、ジャムの瓶へと手を伸ばす。

「でも、大変だな。料理って」

「そうかな」

伊奈帆はコーヒーを飲む。少しぬるくなってしまったが、旨みが出ていて味が深い。同じコーヒーマーカーを使っているのに、二人それぞれ淹れると味が違うのが不思議だ。

スレインがジャムをスプーンで掬い取りつつ、くすりと笑う。

「お前はいつも楽しそうだ」

「うーん。まあ、そう。楽しいね」

伊奈帆はカップに注ぎ足しをする。

「どういうところが楽しいんだ？」

「……それ、聞く？」

「は？」

相変わらず鈍感だなあ、とぼやきたいがやめておく。伊奈帆は一度天井を見た。壁紙の細かい菱形の数を数える。二十四まで数えてやめる。

うん。ちゃんと言おう。

「君が食べれると思うから、楽しいんだよ」

だから、いつも聞くんだ。どっちがいいか、って。

スレインの手から、ぼとりとトーストが落下。幸い皿の上だった。

狭いテーブル越しに、軽い拳が飛んでくる。肩のあたりをぐりぐりして。

「ばか、恥ずかしいことを言うな」

なんて言う。変な顔。過去最大級に照れてるな。

「言わせたのは君じゃん」

「む……」

威力の弱まった拳に自分の手を重ね、ぎゅ、と握りしめてみる。かさかさと少し荒れているけれど、温かい手だ。

その手はとところどころ硬い。それがかけがえなく大切なことのように思える。

「なあ、伊奈帆」

「何？」

言いたいことは、目を見れば分かった。多分、こう。

いつまで、こうしていられるかな、って。

「いや。……美味いか？」

「うん。最初に言っただけ」

だけど彼は言わない。だから、僕もそれには答えない。

スレインが頷き、微笑んだ。

「また、作る」

「それは楽しみ」

こんな風に、未来の約束ができるようになったこと。それを何より幸せに思う。

そのうち、目や耳や、手足や身体の中が駄目になってしまいかも。それは何年も、何十年も先のこともかもしれないし、明日のことかもしれないけれど。

「でも、明日は僕が作るよ」

「好きにしたらいい」

「それよりまずは、今日の仕事をやらないと」

「ああ」

続くのだ。生きている限り。そして、僕らは存外に頑丈だ。

「あれ、コウモリ」

「げっ、オレンジ色」

げっ、とは何だ。と言い返したいところだが、とりあえずそれは置いておく。

学校帰りに、いつものスーパーに寄った。今日は卵と牛乳とトイレットペーパーが特売で、さらにポイント五倍デー。カートを押しつつ食材を物色していたところ、野菜売り場でクラスメイトを発見した。

「君もスーパーとか、来るんだ」

お菓子売り場やパンコーナー、お惣菜のエリアではなく、野菜売り場。意外に思い、伊奈帆の方から声を掛けた。

「オレンジ色こそ」

居心地悪そうに後ろに足を踏み替えて、コウモリ——もとい、スレインは言った。

伊奈帆はカートの買い物カゴを顎で示す。肉類、牛乳、調味料の買い置きと卵二パック。カート下段にはトイレットペーパー。

「夕飯の買い出し。卵が安いよ」

スレインが伊奈帆のカートの上下をじろじろと見て、複雑そうな顔をする。

「……なんか、生活感ありますね」

「うち、姉貴と二人暮らしだから。家事は僕の担当なんだ」

「へえ」

ちらりと見ると、彼が手に持つ買い物カゴにはカップ麺とパンと牛乳と、栄養補助食品が数種類。伊奈帆は余計な一言を言いたくなってそのまま言う。

「栄養偏るよ」

スレインはシニカルな笑みを浮かべた。学校ではあまり見たことのない顔で、はっきり言って全然似合わない。

「いいんです。僕の方だけなので」

でもそれは、言わないことにした。なんだか負けた気がするので。

負ける？　なんでだろう。

「家の人は？」

うんざりとした表情でスレインは首を振る。

「父さんと二人暮らしなんですけど、研究室にこもりきりで、あまり帰ってこないから」

「ふうん」

スレインは目の前のトマトの陳列に顔を向けた。俯き加減の横顔は、やっぱり学校では見たことのない雰囲気で、伊奈帆はどうも落ち着かない。

白い翼を思い出す。ベランダの手摺に凭れて丸まった背中。隣で見上げた横顔は大人っぽくて遠くを見ていて。僕に気づくとこっちを見下ろし優しく笑った。

あの横顔に、少し似ている。

最初は、似てるのは見た目だけ、と思ったけれど。もしかしたら、そうではないのかもしれない。

「うち来る？」

「へ？」

ぽかんと口を開きこちらを見つめるスレインに、声に出ていた、と初めて気づく。伊奈帆は気取られないように一呼吸し、フル回転で即興の口実を考える。

「そんなのばっかり食べてたら、病気になるよ。料理を教えてあげる」
何を言っているんだ、僕は。料理教えてあげるとか。こいつに。

「ええっ!？」

ほら、びっくりしてる。そんなに親しくもない、やたら面倒くさく絡んでくる同級生に、突然こんなこと言われたらそういう反応になるだろ。

「何？ 嫌なの？」

でも、ここまできたらこっちも引けない。開き直りでそう言うと、スレインは猫目を左右に泳がせた。

「嫌っていうか……」

お、押しに弱いな。意外といけるかも？

もうひと押し。どん。

「今日の晩御飯はカレー。食べてく？」

プリンもあるよ、と付け加えると、スレインの目がきらきらつ、と輝いた。

「あ！……はい」

伊奈帆の自宅への帰路を、並んで歩く。見上げた空に、きつぱりとした積乱雲が青空を侵略している。その境界に、二本の飛行機雲が平行線を描いていた。ジェット機の飛び跡をじっと見ていると、黒い翼が見える気がした。

「日本の夏は、暑いですね」

同じ声にはっとする。そして小さくかぶりを振る。

「作りたい料理とかある？」

スレインは顎に指を当て、上を見た。高架下のトンネルに差し掛かる。日影の中は気温が低い。頭も少し冷えたみたいだ。伊奈帆は買い物袋を持ち直す。

「オムライスがいいなあ」

スレインが呑気な感じで言った言葉に、伊奈帆は即座にこう答える。

「初心者には、難易度高いよ」

「そうですか？」

日陰の中を並んで歩く。声と、足音と、買い物袋のガサガサ音が反響する。

「肉と野菜を同じ大きさに切って、火の通り方の遅いものから火にかける。ご飯を炊いておかなきゃだし、卵を焼いて、くるまないと」

買い物袋を肩と肘に、ジェスチャー付きで伊奈帆が説明。スレインはうへえ、と言う顔でのけ反った。

「なんか、複雑そうですね」

料理初心者に、オムライスなんて大それたことはまだ早い。

トンネルの向こう側が眩しくて、伊奈帆は両目を細め、長い瞬きをする。

「はじめはさ」

瞼の裏が赤くなる。血管の線が鮮明に見える。

伊奈帆は瞼を開く。隣を見ると、こちらを見つめる。フロアライトの、鮮やかな碧の双眸が。

「……コウモリにはさ」

肌を焼くような夏の日が、じめつく熱気の中で不思議と清々しい。空を見る。青と白の夏空のコントラストに、飛行機雲はもう見えない。

「スクランブルエッグとか、いいんじゃないかな」

Epilogue [Scrambled eggs]

あとがき

この本を手にとっていただきありがとうございます！

前回の本でもう本なんて作らないかなあ、と言った舌の根も乾かぬうちからの新刊です。伊奈スレってすごいですね。これもオンリーイベントに背中を押していただいたおかげ。主催者様、ありがとうございます。

スレインは天使、と視聴直後から 7 年間ずーっと思っていましたが、なかなか言語化できずもやもやしていました。今回は形にできて良かったです。

またお会いできますように。お付き合いいただきありがとうございます。

鳴海

イメージソング「フローライト」米津玄師

まるで、天使

発行 Scramble/鳴海

発行日 2023.2.19/橙とコウモリ 2

印刷所 (株)しまや出版様

Mail jjncg720@yahoo.co.jp

Twitter @narumiblue

Pixiv ID 955950

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはお控えください。